

復活節第四主日（世界召命祈願の日）

ヨハネ 10・11 - 18

2018.4.21

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

福音によると、キリストは羊飼いで、わたしたちはその羊です。わたしたちはキリストに導かれ、いのちに向かって歩いていきます。

羊は食べ物がどこにあるのかわからない、しかし羊飼いはよく知っています。羊飼いと一緒なら美味しい牧草にあります。こうして羊たちは一つの群れとなり、いのちのほうに向かっていきます。わたしたちにはいのちがどこにあるのか分らないので、いのちの源である父がどこにおられるのかを知っているキリストについて行きます。

やがて復活したキリストは、ペトロに「わたしの羊を飼いなさい」と言われ、羊飼いとされる権能を委任されました。そこからペトロと使徒たちが羊である信徒の世話をすることになります。キリストが信じる者をいのちのほうに向かわせたのと同じように、使徒たちも同じ使命を生きることになります。使徒の後には後継者を任命しました。その後継者をわたしたちは司教と呼びます。使徒の数は十二人でしたが、教会は後継者の数にこだわりませんでした。

こうして分ることは司教様の最も大切なお勤めが、信徒のいのちを豊かにするためにどうしたらよいのかを判断することです。これを司牧と言います。

やがて、信者の数が増えてきていきました。5万人とか10万人などの規模になったら、司教様一人で全ての羊の面倒を見ることは難しくなります。そこで司教様の手と足となって働く司祭が登場します。高円寺教会では吉池神父様です。東京教区に所属する信徒の司牧を菊地司教様一人で行うには物理的に限界があります。

しかも囲いの外の羊も導かなければなりません。高円寺教会の囲いの外側の羊たち、つまり教会の周りに住んでいる信徒以外の人たちのいのちにも心をかけなければなりません。

でも派遣される司祭は生身の人間で、キリストの背丈にまで成長する途上にありますから、キリストのように完成している人格者ではありません。ですから教会に派遣された神父様と教会の信徒がうまくいかないこともあります。そ

んなどときには、「神父さん替わってくれへんかな…」というつぶやきが漏れ聞こえたりします。また「神父さんは結婚もしてないし社会にも出たことがないので世間をよく知らないから、司牧は信徒に任せるべきだ」という人もいます。確かにわたしは結婚生活の大変さ（幸せもあるはずなのでしょうけど…）を知らないし、世間のことも分かっていません。また日常生活において信仰と生活の遊離を肌で感じながらどのように統合すればいいのかという課題を抱えて生きておられ、それはイエスの砂漠の40日のように苦しいものであるとお察しします。

しかし、誰が司牧をするかについては、人間の知恵で判断すべきことではなく神様が決めることです。神様の思いがどこにあるのかをわたしたちは識別する必要があります。そして、神様に選ばれて司牧の仕事をする人は、羊のために自分のいのちをどう使えばよいかと悩まないのなら、司牧者としてふさわしくありません。神様に任命された司牧者は権能を盾に威張り散らすのではなく、羊のためにいのちを懸けることがどういうことであるかを真剣に考える必要があります。

以前、主任司祭ならぬ主任シスターのもとで助任司祭の立場で仕事をしていたとき、主任シスターが一人の信徒をいじめていました。そのことについて意見すると、「神父さんは黙ってください」と一喝されました。それを共同司牧の会議で報告したら、別の主任シスターに「ではあなたは司牧から外れて、秘跡屋さんになってください」と言われました。教会の中において権力の恐ろしさを身をもって体験いたしました。

立場や権威を使って、羊のいのちを台無しにするのは、雇われた羊飼いの姿であって、本当の羊飼いではありません。ある司祭からはこの出来事後「彼女の方が立場が上なのだから当然だ」言われました。しかし、立場が上だから人のいのちをもてあそぶことができるとするなら、それはものすごく恥ずかしいことです。それは司教も司祭も信徒も同様です。今パウハラが世間を騒がしていますけど、教会内でも起こり得る話です。

シスターが司牧者になることは神様と教会が決めることです。その点において反対する気持はありません。しかし、司牧を任命される司祭が最低でも六年間（教会法上の規定による）識別と養成を受けるように、司牧に任命される修道者、信徒にも一定期間の識別と養成が必要であると思います。司教様の識別においてなりたい人はならない方が良い、というのも司牧者の選任に必要

な要素なのではないでしょうか。

キリストと同じ羊飼いの使命を生きるのは、教会から公に任命された司牧者（役務的司牧者）だけではありません。神学的には洗礼を受けた者はキリストと同じ神の子となり、王職（牧職）、預言職、祭司職をいただくと言われていきます。それらを頂いたわたしたちは、権限を振りかざすのではなく、他のいのちのために自分のいのちをどう使っていくかが問われます。

教会から任命されて司牧者となった人は、「一粒の麦が地に落ちて死ねば豊かな実を結ぶ」という福音をことばと行いによって証します。

こうして洗礼を受けたわたしたちも、仕えられるためではなく仕える生き方に召されたことを思い起こします。